

麦作情報 No. 3

令和3年2月16日
西松浦農業改良普及センター

1. 気象概況

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
1月	4	5.1	5.7	9.3	10.2	1.0	0.7	15.6	0.0	14.1	33.3
	5	4.8	10.9	9.1	14.9	0.6	6.6	14.8	17.5	15.4	14.0
	6	4.7	6.5	9.1	11.8	0.4	1.0	13.6	12.5	21.3	26.2
2月	1	5.0	6.6	9.7	11.3	0.6	1.7	9.8	56.0	20.2	26.7
	2	5.7	6.5	10.4	12.4	1.0	1.2	12.2	4.0	21.9	44.4
	3	6.2	11.2	11.0	17.4	1.5	5.9	16.8	23.0	22.5	14.2

- 平均気温は、1月4半旬から平年並み〜高く推移した。特に1月5半旬および2月3半旬は平年より5℃程度高く推移した。
- 断続的な降雨により、1月4半旬から2月3半旬の降水量は113mmとなり、平年より多くなった（平年比136%）。
- 日照時間は、2月3半旬を除き、平年並み〜長くなり、多照傾向で推移した。

2. 生育概況

- 12月および1月上旬が低温傾向で推移したため、生育は平年並み〜やや遅くなっていたが、1月中旬から気温が高く推移したことで生育は平年並みとなっている。
- 12月下旬からの断続的な降雨により、長期滞水した圃場や排水対策が不十分な圃場では、湿害による下葉の黄化がみられている。
- 気温上昇や降水量増加に伴い、煌二条およびササキ-ルゲの両品種ともに大麦網斑病の発生が散見される。

《麦類の生育状況（2月16日時点）》

- 11月15日頃に播種された圃場では、現在本葉8葉目が展開中（7葉期）、幼穂長約1.5cm
- 11月20日頃に播種された圃場では、現在本葉7葉目が展開中（6葉期）、幼穂長約5mm
- 11月下旬頃に播種された圃場では、現在本葉6葉目が展開中（5葉期）、幼穂長約1mm

3. 今後の管理

1) 肥培管理

- 播種時期により管理が異なるため、下記を参照にする。
※地力がある圃場（堆肥連用田など、令和2年産麦で倒伏した圃場等）では、麦の生育量および葉色から判断して施用量を減じるなど調整を行う。

①11月15日頃播種

- 茎立ち期を迎えている。
麦踏みは行わず、土入れ中心の管理とする。
穂肥を施用していない圃場では、速やかに穂肥を施用する。

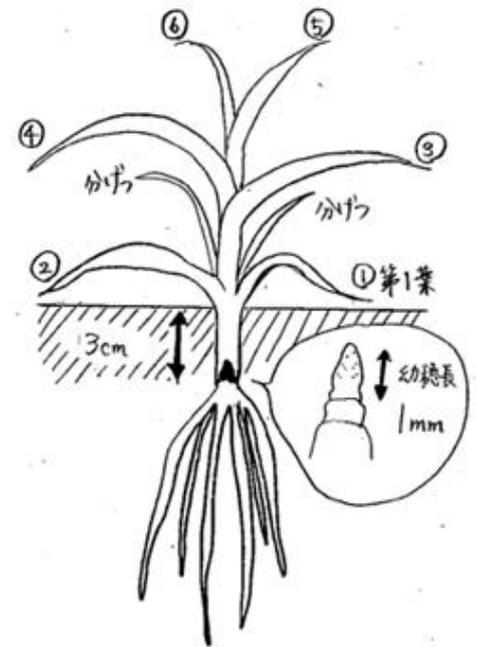
②11月20日頃播種

- 節間伸長期を迎えており、まもなく茎立ち期を迎える。
来週中ごろを目途に穂肥を施用する。
※ハーモニー75DF 水和剤は、散布晩限を迎えているため使用しない。

③11月下旬播種

- 幼穂形成始期を迎えている。
麦踏は来週中ごろまでとし、その後は土入れ中心の管理とする。
2月下旬を目途に穂肥を施用する。

幼穂形成始期（麦 5.5L～6.0L 頃）

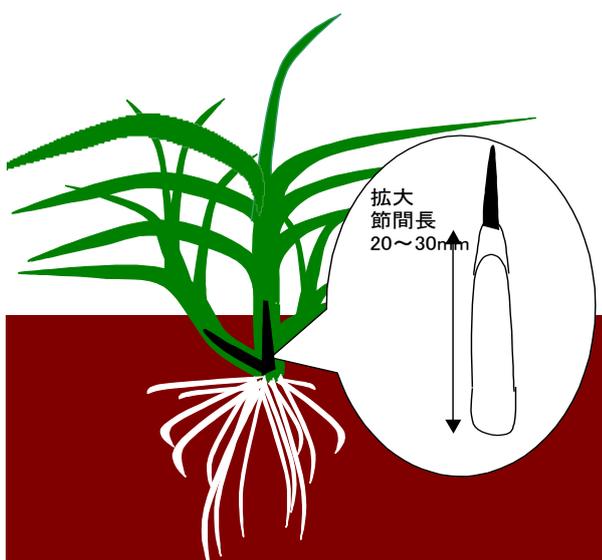


2) 排水対策

排水対策については、麦作情報 No.2 を参照（西松浦農業改良普及センターHPに掲載しています）。

3) 麦踏み、土入れ

- 必ず圃場が乾燥した状態（畝間が白乾している状態）で、麦踏み（3葉期以降から）や土入れ（5葉期以降から）を実施する。
- 土壤水分が高い状態で麦踏みを行うと、土がしまり湿害による根痛みを起し、マイナス要因となる。（土を手で握り、湿った状態であれば、無理な麦踏みは避ける。）
- 草丈が30cm 以上になると、麦踏みを行うと完全に立ち上がりきれず、その後倒伏しやすくなるため麦踏みは行わず、土入れ中心の管理を行う。
- 麦踏み、土入れの効果については、麦作情報 No.2 を参照。



茎立ち期

【節間伸長期】

茎の節間が5mm となったとき（葉齢は7葉期）。
節間が伸長し、幼穂が地上部近くに上がってくる。

【茎立ち期】

節間伸長期から2週間程度経過した時で、節間が2cm に達し、幼穂が地上部に上がってきたとき。

この時期になると麦踏はできない。

幼穂凍死の危険が高くなる。

茎立ちが早いときなどは、幼穂保護のため土入れを実施する。

4) 雑草防除

- 水稲刈り取り後雑草が繁茂していた圃場、耕起前の防除が不十分であった圃場では、スズメノテッポウ、カズノコグサ、タデ類、トゲミノキツネノボタンなどの発生が散見される。
- 土入れによる雑草防除を実施するとともに、こまめに圃場の雑草発生状況を把握し、除草剤の処理時期を逸しないよう対策を徹底する。
- 除草剤効果を保つため、雨前を避けて散布する。(天気予報を確認してください)
- カラスノエンドウは収穫時に混入する危険性が高いため、毎年発生している圃場や、すでに発生がみられる圃場では、アクチノール乳剤による防除を徹底する。
- 「ハーモニー75DF 水和剤」の使用時期は「播種後～節間伸長前まで」なので、使用の際は麦の生育状況に注意する。カズノコグサの防除は播種直後処理剤と「ハーモニー75DF 水和剤」(カズノコグサが1～3葉期までに)との体系処理で行う。

※カズノコグサとスズメノテッポウの識別については、[麦作情報 No.2](#) を参照。

★除草剤散布後は、以下のことに注意する★

- ①「麦踏み」は、除草剤散布後に薬剤の影響で葉が黄色くなっている場合、麦へのダメージが大きいため、散布後1週間は控える。同様の理由で、麦踏み直後の除草剤の散布も控える。
- ②「土入れ」を、除草剤散布後すぐ行くと、雑草の蒸散作用が抑制され有効成分の根部吸収が妨げられるので散布後1週間は土入れを控える。(特にステージの進んだ雑草の場合は十分に間隔をあける)

○播種後除草剤が散布できていない圃場や、雑草の発生がみられる圃場では、除草剤の処理時期を逸しないように早めに茎葉処理剤を施用する。

農薬名	効果のある雑草	使用量	希釈水量	使用時期	総使用回数	使用上の注意事項
ハーモニー75DF 水和剤	イネ科雑草 ・双メカテッポウ ・カズノコグサ 広葉雑草 ・ヤムグサ ・カサ ・ハバ ・トゲミノキツネノボタン	5～10g /10a	100L /10a	播種後～節間伸長前 ※カズノコグサに対しては、 麦1葉期～節間伸長前	1回以内	<ul style="list-style-type: none"> • 播種後にハーモニー細粒剤 F を散布された圃場では使用できません。 • 薬害が生じやすいので周辺作物への飛散に注意。 • 使用器具の洗浄を入念にし、他作物との併用はしない。 • 双メカテッポウ、カズノコグサには効果が弱い(抑制するが枯死しない)
アクチノール乳剤	広葉雑草 ・ヤムグサ ・カズノコグサ ※イネ科雑草には効果がない	100～200ml /10a	70～100L /10a	穂ばらみ期まで (雑草生育初期)	2回以内	<ul style="list-style-type: none"> • 広葉雑草多発田に使用し、ヤムグサ、カズノコグサに効果が高い。 • 湿度に左右されず使用できる。 • 散布後、20日程度で枯死。 • 接触剤なので、必ず雑草の茎葉に散布する。 • 気温が高い日の散布は薬害が生じるので注意が必要。

5) 病害虫防除

○網斑病

- 近年、網斑病の感染が拡大傾向にあるため、薬剤防除を徹底する。
- 本年は、1月中旬から高温多雨傾向で推移しており、網斑病の発生が散見されている。
- 網斑病が多発した場合、収量が**3割程度減収**する可能性がある。
- 現在、網斑病の多発生がみられる圃場においては茎立ち期にチルト乳剤、出穂期にシルバキュアフロアブルによる防除を行う。

(※チルト乳剤の大麦に対する使用回数は1回までなので、農協のヘリ防除を利用する場合は、出穂期頃にチルト乳剤散布となり使用回数を超えてしまうため、茎立ち期にチルト乳剤の散布はできない。その場合は、茎立ち期にシルバキュアフロアブルを散布するなどの対応を検討する。なお、チルト乳剤およびシルバキュアフロアブルの使用にあたっては、網斑病に対する無人航空機による散布の登録はないことに注意する。)



写真1 大麦網斑病の病斑



写真2 大麦網斑病の病斑

【防除薬剤使用基準】 (対象作物は大麦)

薬剤名	適用病害虫	希釈倍数	10aあたり 散布量	使用時期	使用回数	散布方法
チルト乳剤25	網斑病	1000倍	60~150L	収穫21日前まで	1回	散布
シルバキュアフロアブル	網斑病	2000倍	60~150L	収穫14日前まで	2回	散布

6) 鳥獣害対策 (カモによる食害) ・酸性土壌による障害

鳥獣被害対策および酸性障害については、麦作情報 No.2 を参照 (西松浦農業改良普及センターHPに掲載しています)。

R3年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値 (伊万里)

西松浦農業改良普及センター

